

# 文政期の蕉門系尾張俳書と『新冬乃日』——曾洛の暁台顕彰活動（一）

寺 島 徹

化政期の尾張俳人、照井曾洛（一八三七没）の残した著作をうかがいながら、加藤暁台（一七三二—一七九二）の連句資料『新冬乃日』について検討し、翻刻したい。

## 一 暮雨巷と曾洛

尾張の中興期俳人として暮雨巷を経営した暁台の資料収集と整理をこころみよとする場合、生前になった俳書はもとより、弟子における追善集、覆刻本の類いを看過することはできないであろう。

たとえば、『暁台句集』の臥史跋文において、「今はむかし先師机下に一冊子あり。こは折にふれたる自詠を筆し、或は門人等打聞まゝにしるしおけるを、ほど遠き朋がらハ見聞のつぶさならざる事をうらみ、あながちに木に彫む事を乞侍れど免し給はざりし」と述べるように、暁台自身は、自筆書留類を梓に上すことをよしとしなかったようである。ひいては、稿本を上梓すること、また、稿本を残しておくことに禁欲的であったことが想像される。実際、生前に認められた発句の自筆稿本は残っていない。本人が意図して残した稿本・書留類は、発句、連句を通して少ないのである。<sup>①</sup>このような状況を考慮するとき、暁台資料を集約するためには、弟子たちの顕彰活動を丹念にたどり、整理していく必要性があるだろう。暁台の暮雨巷は、二世として桜田臥史

（一八一〇没）がつぎ、三世は村瀬帯梅（一八二六没）、四世照井曾洛と続く。臥史がなした『暁台句集』『続姑射文庫』といった業績は、暁台の行実をやる上で欠かせぬ資料である。尾張知多横須賀の帯梅も、暁台の直弟子であり、暁台の顕彰につとめた。曾洛は、直接、暁台の薫陶を受けたわけではないが、暁台に私淑し顕彰活動に励んでいる。

近年、暮雨巷四世、照井曾洛の俳書について『和漢俳諧集』をはじめ、数点、手に入れる機会を得た。あらためて曾洛の俳書を見ると、従来指摘されている廻文、和漢俳諧といった趣味性以外にも、曾洛の持つ俳諧史観（暮雨巷顕彰の意味）について検討を要することに思いあつた。

本稿（および次号）では、これまで、まとめてとりあげられることの少なかった曾洛の暁台顕彰活動について、連句資料（『新冬乃日』、『新幽蘭集』）を中心にとりあげることにはしたい。なお、曾洛の表記について、原本に曾洛とある場合をのぞき、「曾洛」で統一する。

## 二 曾洛の俳書と俳諧活動

曾洛について記しておこう。『金鱗九十九の塵』巻廿四（名古屋叢書第6巻地理編1、昭和34年）では、瀬戸物町の俳諧師として「十字

盧曾洛 姓は照井、名は長四郎といへり。業は金具師。俳諧は臥史の門人なり。後暁台の四世を継ぎ暮雨巷と称す。」として、「大やうにまつ夕日や年の庭」の句をあげる。

市橋鐸氏・服部徳次郎氏『中京俳人考説』(文化財叢書71号、昭和51年)に閱歴が記される(ただし、『暮雨巷暁台の門人』に立項はない)。没年は、天保八年(一八三七)六月八日。曾洛(曾洛)・十字廬・暮雨巷と号す。墓地は、名古屋七小町普蔵寺とある。小寺玉晃稿『愛知古今俳人百家撰』(岩瀬文庫蔵)にも、四代目暮雨巷曾洛として記載がある(富田和子氏ご教示)。

ただし、『中京俳人考説』の解説の第五節「士朗中心の文化・文政期」の「士朗没後の文政期」の項目では、竹有(塊翁)を中心とした尾張俳壇の趨勢が素描されるものの、曾洛に関しては、ほとんど記述がなされていない。曾洛の俳諧活動について、おもに藤園堂蔵の尾張俳書をもとに、編集、刊行した俳書を概観しながら確認してみたい。成立年代順にみていこう。<sup>2)</sup>

曾洛の俳書への入集は、文化元年の竹有編『花鳥楽事』、唯阿・快台編『浜庇』あたりが初見となる。

片扉ぬれて夜明る野分かな

曾洛(花鳥楽事)

新酒かと居住る直す笑かな

曾洛(浜庇)

その後、文化期の暮雨巷、枇杷園の俳書に発句が散見する。『草神楽』(梅夫編、文化六年)、『閔清水物語』(于当編、文化六年)、『玉兔集』(梅葉編、文化七年)、『長寿楽』(応汀編、文化八年)、『飲中八歌仙』(野秀・平斎・五道編、文化八年)、『歳晚集』(鹿野編、文化八年)に発句の入集が見られる。ただ、文化初期から尾張の士朗系、竹有系俳書への入集が多く見られる大巢、月底あたりと比べても、この時期の活躍は目立ったものではない。

曾洛が尾張俳壇の表舞台にたつのは、『東帖』の編纂においてであ

る。曾洛編『東帖』は画入句集。半紙本一冊。士朗、臥史、曾洛ら序。文化八年刊。永楽屋東四郎板。序には、「はるやいかに(臥史)、あけぼの山の(竹有)、まばら松(秋麿)、田毎の月(桂五)、須磨の寂(鹿野)、今朝方のほそみは(徐英)、曾洛が替の句をすすめて(曾洛)、をかしき一冊とつゞりけるは(己伯)、一筆づゝの序をそへて(大阜)、大笑することになん(朱樹)」と尾張の当代俳人の真蹟を寄せ書きながら記している。士朗真筆模刻をはじめ、三十四の発句と、十八種の俳画を組み合わせている。伝本は洒竹文庫のみ。臥史はすでに前年に没しているが、士朗は存命であり、このような自筆の序をもらい受けていることから、臥史の門人である曾洛が士朗にも親炙していたことが認められるであろう。<sup>3)</sup>

この時期の俳書には、士朗系、竹有系の俳書を中心に『侘草紙』(楚山編、文化九年)、『春秋楽』(梅間編、文化十年)、『いたびさし』(塊翁編、文化十一年)、『安浪馬声所』(楚山編、文化十二年)、『風の筋』(梅花園主人、文化十四年)などに発句の入集が認められる。また、文化九年から文化十一年にかけて、奇人として知られる逸人が、矢継ぎ早に俳書を刊行しているが、その編者『冬嶺松』(文化九年)、『鶯囀梅』(文化十年)、『桃桜』(文化十年)、『酔月集』(文化十年)、『雨華』(文化十年)等に、発句の入集があり、『四季三番叟』(文化十一年)に付け句の入集を見ることができるといえる。

この時期の曾洛の業績としては、『新幽蘭集』という暁台連句資料を上梓していることが特筆されよう。『新幽蘭集』は、連句集。半紙本一冊。暁台撰、曾洛編。文化十三年白鶴亭大蘇序、五道序。暁台の風羅念仏集の芭蕉追善脇起し俳諧を、暁台遺稿より補い、これを季別にわけて、全九冊にまとめたものという。暁台の連句遺稿として貴重。ただし、第二冊以下は出版されたか未詳である。天明元年の蕪村序、清絢序も掲げる(『新幽蘭集』については、別稿で詳述予定)。

同じ時期には、『新姑射文庫』も上梓している。『新姑射文庫』は、絵入俳書。大本三冊。曾洛編。月樵画。一面一画一句の絵入り俳書で、文政紀元戊寅十一月既望刊。江戸書林前川六左衛門、尾州永楽屋東四郎外三軒相版。文政紀寅菊月、五道序。曾洛自ら跋を付す。五道序に「姑射文庫は暁台先生の発行なりしを臥央老人も続編せらる。いまはた曾子洛これを物して師のこゝろざしをつがむと。」とあるように、暁台の『姑射文庫』、臥央の『続姑射文庫』を受け継ごうとしたものである。

忘れてはまたるる空ぞほととぎす 曾洛

このように、文政初頭までは、地道に暁台の散佚資料を掘り起こし、顕彰しようとの姿勢がみられる。ただ、『新姑射文庫』の企画は、帯梅の暮雨巷三世継承から、あまり隔たりのない頃である。将来の暮雨巷継承への意識が芽生えていたのかもしれない。

文政前期の俳書への入集は、『龍の登 甲乙』（帯梅編、文政元年）、『あとのともし』（二代専庵編、文政元年）、『ねずのせき』（不転編、文政元年）、『初音集』（逸人編、文政二年）、『名古屋俳家集・俳諧ます鏡』（文政二年序）、『犬蓼集』（月底編、文政四年）、『みなれし』（呉山編、文政四年）、『さみだれ』（月底編、文政七年）、『臼うた』（庭雅編、文政七年）等の尾張俳書を中心に発句が見られる。

文政も半ばにさしかかると、曾洛に大きな転機が訪れる。二条家俳諧への参加である。曾洛編『御懐紙 田刈集』に、曾洛が二条家俳諧のため参殿した様子が詳しく描かれる。『御懐紙 田刈集』は、大本一冊。文政五年（序）成立か。『尾三古俳書解題』には題目が立項されるのみで、内容の記述はみられない。版面は特徴のある雷文繋ぎが目をひく。暁台編の二条家俳諧資料『花のしるべ』（天明4年刊）を想起させる様式である（図1参照）。内容は、花の本の二条家俳諧に関するものであるが、これまで言及されてこなかった。書誌を示して

みよう。

〈書誌〉

装幀 大本一冊  
表紙 共表紙 裏見返、裏表紙ナシ  
寸法 縦二七・〇×横一九・八糎。  
外題 「御懐紙 田刈集」中央刷付  
柱刻 なし

匡郭 全丁、雷文繋ぎ（薄茶）

丁数 全二十七丁。

行数 序文（八行）。百韻（十行）発句（半丁一人一句）

刊記 なし

編・序跋 暮雨巷曾洛編。自序。雨耕序。

印 「旭湖」（朱文方印） 1オ

所蔵 藤園堂蔵。

雨耕の序に、二条家俳諧に纏わる経緯について、次のように記している。

中興暁台先醒す、き尾花のやうに散乱したるを一時、正風に帰せしめてより尚銅駝殿にへのぼりて花の本とあふがれ、其芳名唐土仏国は啞実にわが日のもととは知らぬ火の」（序一オ）、つくし・さつま・出羽・みちおくの果までも此風韻をうたハざるハなし。夫よりして蘭更、玉屑、臥央、月居、蒼虬その余連綿として月花の御会今に怠転なく天皆しる也。いぬる亥とし四世暮雨巷おなじく銅駝殿に登り」（序一ウ）普うい学の人に道しをりせよとのミゆるしをかふむられしより、いよ、此道に深切なり。ことしミ午卯又月の御會にのぼり和漢の御俳諧あり。しりへにつく三十六句にハありがたきゆへよしはれば捨置んよりハ梓に」（序二オ）乗

せて諸風土に是を沾んと書肆がしハぶきを聞つけて、予にさゝや  
かれけるにいなみがたくて、冬至の日の日なたひらに這出て蔵六  
雨耕、其ことわりをなぐり書して其責を防ぐ而已。」(序二ウ)

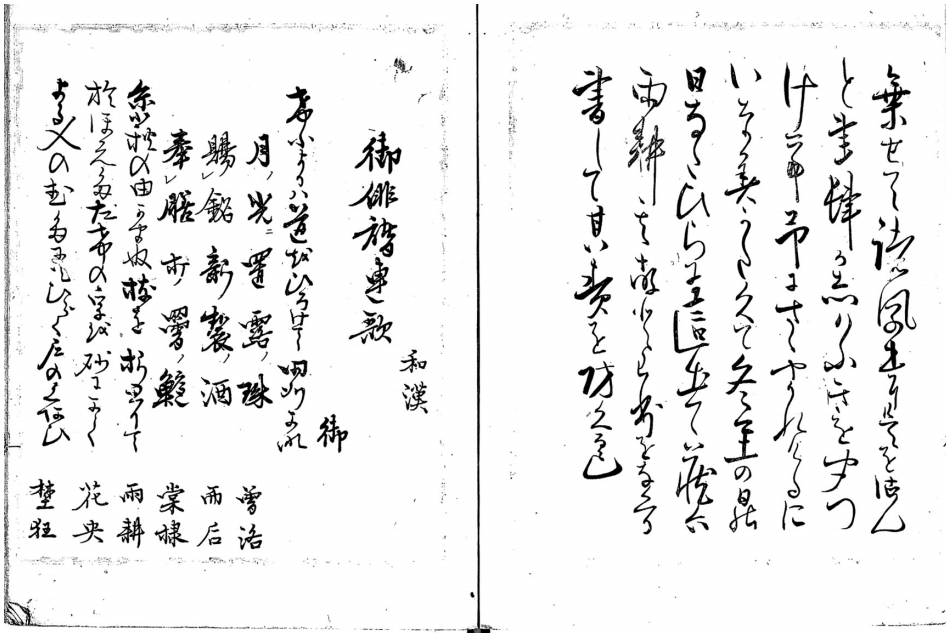


図1 『御懐紙 田刈集』(藤園堂蔵)

これにより、曾洛が暮雨巷の四世を継承したことになる。それと  
もに、暁台、闌更、月居、玉屑とつづく、二条家俳諧の宗匠となつた  
ことが明示される。その和漢の百韻表の八句と名残の花の部分を示し  
てみよう。

御俳諧連歌 和漢

けふより八道をひろけて田刈かな 御

月、光置露、珠 曾洛

賜銘新製酒 而后

奉膳打習鮑 棠棣

糸萩のゆかまぬ枝を抜とりて

おほえたたけの字を砂にかく

よる人のむたにもひらく戸のぐあひ

静差入冬/晡 漱石

(中略)

いや高き花の梢を仰くなり

永日/影融娯 雨泉

宗匠 曾洛

御執筆 雨席

御香元 棠棣

御執夏 花央

士岳

春水

そのあと、左右に、鳳台、雨耕、而后、棠棣ら曾洛一門の月の発句  
を示している。

有明や船にね過すひとりごと  
追加の巻末にも、

曾洛

うぐひすや金とりまハすやうな声  
とある。

曾洛

晧台が寛政二年に二条家俳諧を創始したことは、つとにしられるが、臥史も宗匠はつとめていないものの、執筆として参加した。その系譜に曾洛も自らを重ねることで、暮雨巷の正統な継承者であることを内外に誇示した観がある。一つ気にかかるのは、文政五年次には暮雨巷三世を継いだ帯梅がまだ存命している（帯梅は文政九年（一八二六）没）ことである。文政五年に、二条家俳諧の宗匠をつとめた時点で暮雨巷の継承がなされたとみるべきであろうか。

『尾三古俳書解題』には、年次が文政五年と記されるのみで、その根拠は不明である。雨耕の序のからは、「いぬる亥どし」（文化十二年か）に、二条家に召し出されたあと、「ことしみ午」（みずのえ午ということなら文政五年）に御会の和漢俳諧を行ったようにとれる。ただし、文政五年と考えると、暮雨巷三世・村瀬帯梅の存命中（文政九年没）であり、曾洛が堂々と暮雨巷四世を名乗るのは、不審に思われる。また、曾洛の撰集を概観した場合、代表作『新姑射文庫』（文政元年）、『廻文はした柴』（文政七年）、『和漢俳諧集』（文政十三年）の中で、入集者を比較すると、俳人の重なりという点で、文政中盤の『廻文はした柴』と重なるのは楚山ぐらいいしか見られない。漱石、士岳など多くは、文政末期の『和漢俳諧集』と重なっており、『和漢俳諧集』と御会のメンバーは一見して近いように感ずる。ただし、御会には、花央、對我など、『新姑射文庫』の時代からの門葉も含まれ、また、雨席、棠棣、桎狂、箕張などは、文化末く文政前期の他派の尾張俳書に数多く参加している。このことから、御会のあった時期および『御懐紙 田刈集』の成立時期が、文政五年であっても、とくに問題は生じ

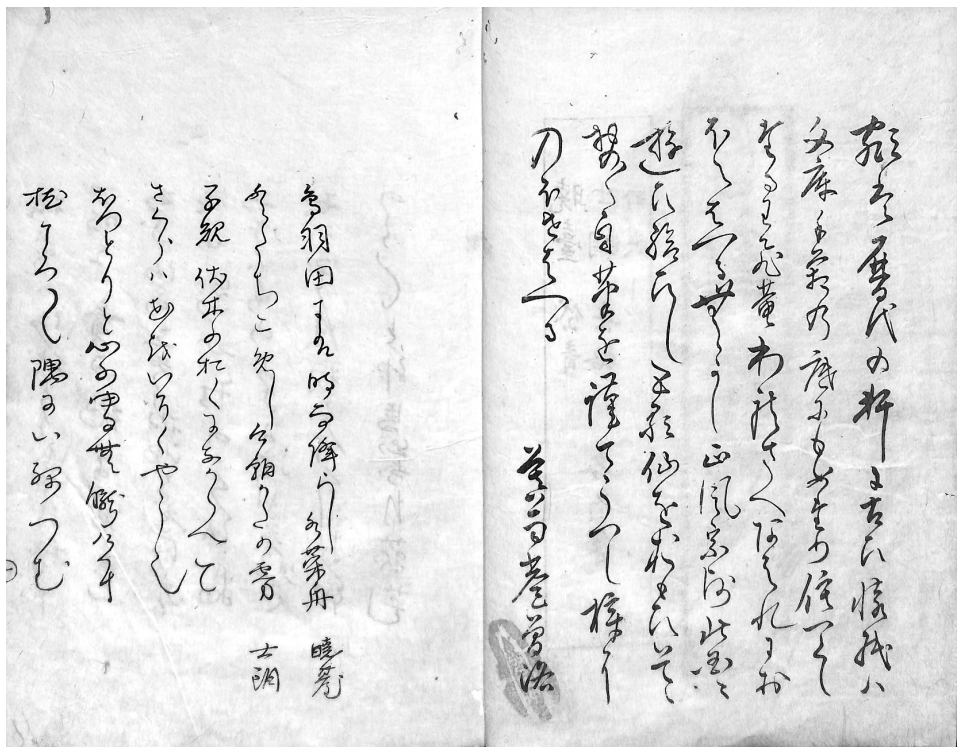


図2 『新新乃日』（架蔵）

ない（「ことしみ午卯又月」の「卯又月」は、あまり見られない言い方で、これが、閏四月を指すのであれば、文政二年とも考えられるが判然としなない）。一応、現時点では、曾洛が、文化十二年に二条家に

召し出されて、文政五年に、雨席、棠棣らの他派の尾張俳人を門弟たちに加えながら、御会を行ったものの、帯梅の手前、すぐに本を出版することはせず、帯梅没後の文政後期に、本としてまとめ上梓したものと推測しておく（文政十年の亥年に召し出され、天保五年午の年に俳諧を執り行った可能性も否定できない。後考を俟ちたい）。ともあれ、この時期、俳書の入集状況をもても、曾洛が尾張俳壇で確固とした地位を占めつつあることがわかる。

曾洛編『新冬乃日』が上梓されたのも、これ以後であろう。『新冬乃日』は、五歌仙集。半紙本一冊。『尾三古俳書解題』では、「文政元年刊」とするが根拠不明。表紙裏に「暮雨、老曾洛著」（図2参照）とあるため、四世襲名以後であることは明らかである。この頃から文政末頃までになったものであろう。内容は、暁台と暮雨巷高弟の士朗、臥央、岱青、岳輅らによる真蹟模刻の歌仙をあつめたもの。序は、芭蕉の『冬の日』の「木枯らし」の巻を引用し「懐紙は文庫手箱の底にもめたり。侘つくしたるわび庵、われさへあはれにおぼえはべる」と戯れ、「むかし正風宗師此国に遊び給ひし五歌仙をおもいで、おの／＼自筆を謹てうつし梓にのぼせはべる」として、諸家の真蹟模刻の五歌仙を載せる（書誌については、次節で後述）。これも暁台顕彰活動の一環といえる。

この頃になると、暁台の顕彰、暮雨巷事業の継承を目指すという側面に加え、曾洛独自の試みもみられるようになる。『廻文はした柴』がその好例である。

『廻文はした柴』は、廻文趣向の連句発句集。半紙本一冊。曾洛編。文政七年自序。題目、序文など、すべてに廻文の趣向が盛り込まれた趣味的な連句発句集である。暁台、臥央ら物故俳人の廻文発句も載せる。

今朝みるは素不二の詩賦すはな見酒

朝望曾洛

冒頭に曾洛の廻文歌仙を収め、趣向に富んだ試みといえよう。

文政期末に、曾洛は、『和漢俳諧集』を上梓している。『和漢俳諧集』は、和漢の漢対句および発句を収める俳諧撰集。暮雨巷曾洛撰。文政十三年三月花央序。当代俳人にくわえ、暁台、士朗、臥央、也有や物故俳人の漢句、発句も収める。『御懐紙 田刈集』で、和漢百韻を試みた曾洛ならではの撰集ともいえよう。一部多色刷りや、変わり絵の手法が取り入れられる。中には、月樵が句中に团扇を實際に書き入れるなど、蕪村を想起させる趣向もとられ興味深い。雅趣に富んだ奇書である。

おうやうに松の日かげや年の庭

曾洛

ここで、文政期中盤から天保にかけての俳書への入集状況について確認しておこう。『飛濃紀佳散』（茂東編、文政九年）、『十かへり』（梅間編、文政十年）、『湯のかたみ』（秋磨編、文政十年）、『言葉屑』（塊翁編、文政期か）、『むくげがき』（梅園編、天保三年）、『枇杷の実』（士朗二十三回忌追善、不転編、天保五年）、『ちまちだ集』（大巢編、天保五年）等に発句が確認できる。

他にも、曾洛編で年次不明の俳書に『前一興』という撰集がある。半紙本一冊。絵入り（月樵）。藤園堂蔵。『尾三古俳書解題』に採録されないのので、書誌を簡略に示しておこう。

△書誌▽

装幀 半紙本一冊。袋綴。絵入り（月樵画）。表紙 とのこ色、無地表紙。寸法 縦二二・七×横一五・七厘。左肩題簽剥落。柱刻 「一／＼十三」（「八」が重複）全十四丁。「右 曾洛製」（奥）。表紙、表紙見返し、裏表紙見返し、裏表紙に西郷文洲による書き込みあり。藤園堂蔵。

士朗と城南坊の句を巻頭におく。城南坊は、津金氏（庄七）。尾張の人。文政十二年八月十四日没（『尾張俳人考』）。城南坊を追善した

ものであろうか。一応、文政後期から天保初頃と考えここで紹介しておく。士朗の句を冒頭に絵入りで掲げているのが目をひく。

風や山里近き峯の月

朱樹（士朗）

風やはだかになりし峯の月

城南坊

曾洛、沙鷗、而后、芝石、月底らの発句がつづく。曾洛の句には、

あり／＼と霰ながらに氷かな

曾洛

辛崎や氷らぬ物ハ杉ばかり

曾洛

明星や松の陰さす霜の門

曾洛

静さに何思ひ出や走り炭

曾洛

うつくしき始終りやかれを花

曾洛

などを収め、つづいて、曾洛、風荷、途桂らの俳諧歌仙行一折を収める。終末に、一丁半にわたり、曾洛による、「竹の歌」をおさめ、巻軸は、

月に花により／＼竹のあらしかな

曾洛

となっている。

このような俳諧活動を経て、天保期に入り、曾洛の著作としてもっとも世に知られている『文庫開』が上梓される。いわゆる『文庫飛良綺』は、天保四年冬の刊行。「全部七冊」とあるが、巻一のみが現存し、二巻以下は刊行されたか不詳。暁台および自らの俳諧観について、「俳諧史」「俳諧の効用」「句の案じ方」「暁台付け句の論」「月樵の画論」等をもとに述べたものである。とくに、蕪村、暁台、蓼太らによる中興期俳諧運動を「天下ひと手の風」と述べるくだりは、中興期俳諧研究に頻りに引用されており、その俯瞰的な視点は、一瞥に値する。暁台の連句観等の見解に疑問の残るところはあるものの、曾洛の俳諧活動の集大成的な俳書と考えられる。

曾洛の活動を俳書の編纂と入集状況をもとにみてきた。大ざっぱに言えば、享和末々文化初頃より、枇杷園、暮雨巷周辺で俳諧の道に入

り、臥央、士朗あたりに親炙した様子がかがえる。『東帖』はその所産であろう。文化末々文政初にかけて、『新幽蘭集』『新姑射文庫』を出すことで、暁台への私淑が顕著となり、暮雨巷への志向を尾張俳壇に示すことになる。この頃は、ちようど、帯梅が暮雨巷三世を襲名した頃である（『龍の登』参照）。帯梅系の俳書にも顔を出すため、表だっての軋轢があったわけではないが、知多横須賀の帯梅に対する名古屋出身の曾洛の意地のようなものをうかがうこともできようか。文政なかばの二条家俳諧への出座は、曾洛のその後の方向性を顕著に示すものであった。『御懐紙 田刈集』（文政五年か）で二条家俳諧の宗匠を勤め、暮雨巷四世を名乗ることは、曾洛にとってもっとも大きな意味をもっていったのだ。

ここで、曾洛がなした『都久問大』をみてみよう。『都久問大』は大本一冊。文政五年以降刊。扉の表に、俳諧之二神として芭蕉、守武を上段に掲げる。その下段に五老として、士朗、羅城、桂五、岳輅、岱青をあげる。次の丁に、上段に銅駝殿宗匠として、暁台、臥央、曾洛かかげる。下段に六宗匠として、当代の快台、曾洛、不転、さゝを、芝生、大巢をあげる。つづいて、

まどかにて二夜も三夜もあきの月

暁台

を巻頭に、露川、水草、知足、越人、桐葉、野水、也有、士朗、臥央ら、高名な尾張蕉門の句を掲げていく。その後、而后、雨耕ら、当代俳人らの発句が続く。巻軸は、

さをとめや門も出ぬのうたひかけ

曾洛

である。銅駝殿宗匠として自らを暁台―臥央―曾洛という名古屋暮雨巷の系譜に位置づけたのである。高名な俳人たちの中で自らを巻軸に添え、尾張の当代の代表的俳人としての自信を示したものといえよう。

同じく、文政中期から末になったと思われる暮雨巷俳書として藤園堂蔵の『増姑射文庫』（仮題）がある。簡単に書誌を記しておこう。

△書誌▽

半紙本二冊。袋綴。表紙、花浅葱色、亀甲紋繋ぎ艶出。絵入り(月樵画)。縦二三・四×横一六・〇(上・下)。左肩題簽剥落。柱刻「姑射一(三十二)」(上)、「姑射一(三十二)」(下)。丁数、三十六丁(上巻)、三十五丁(下巻)。序に「鳳凰軒武貫」(落款印)。奥に「中廬書記」(朱文方印)

武貫の序に、「先に編れし姑射文庫は暁(台)臥(央)両叟のころを続ける切成もの」と記すように、「増姑射文庫」も、自らが企画した『新姑射文庫』に続く絵入り俳書で、ここでも、暮雨巷の権威を身に纏わんとする姿勢は明らかであった。

このような俳諧活動を概観するとき、曾洛の活動は、暁台の顕彰を通して自らを尾張暮雨巷の継承者として位置づけようとの意図があったことがうかがえる。二条家俳諧で和漢聯句を用いたこと、『和漢俳諧集』(文政十三年)の試みなどは、独自性を示したものともいえる。うが、和歌趣味で知られた暁台自身が『和漢牡丹合』(安永七年刊)の試みをしていたこともあり、これとて、暁台への思慕がみとめられるのである。

暁台以後の尾張俳諧(三河まで含めて)を俯瞰するとき、臥央の暮雨巷より、士朗の枇杷園が圧倒的な勢力をしめていた。士朗が尾三俳壇をまとめ、暮雨巷を継いだ臥央は、月並句合を行いなから、起や知多といった限られた尾張俳壇を門下としていた印象がある。士朗・臥央が相次いで没した文化九年以後は、その門下として、卓池、秋挙、竹有らがそれぞれ独立した宗匠格となって俳壇を形作っていく。竹有(塊翁)は、自派の「月並句合」や歳旦を催し、尾三に門葉を広げていき、卓池は、のちに天保の四老人とうたわれるほど、全国の俳人たちと交流を広げた。秋挙も暁台、士朗の師匠に限ることなく、『惟然坊句集』の覆刻など蕉風の顕彰につとめている。知多の帯梅・大阜は、

横須賀を拠点としながら、名古屋や全国各地の俳人たちと精力的に俳諧交流を行っていた。<sup>7)</sup>

一方で、化政・天保期には、士朗門から竹有(塊翁)についた沙鷗、大巢、不転、月底、狂俳でも知られる芝石といった次世代の宗匠クラス竹有系俳人の活躍も目立つようになる。大巢、月底らは、文化初期から士朗系、竹有系の俳書で目立った活躍を見せており、その後も、尾張俳壇において、中心的な役割を担っていく。このような尾三の俳壇の趨勢をみると、臥央門の曾洛の活動は、やや見劣りがする観は否めない(而後も臥央門から竹有門へ帰している)。文化期から文政期にかけて、尾張の蕉門系俳書への入集は多くみられるものの、他地域の蕉門系俳書(たとえば、士由編『美佐古鮮』(文政元年)など)への入集はほとんどみられない。卓池を中心とする『安居鐘』(士朗十三回忌、卓池・秋挙編、文政七年)、『燕岡集』(卓池編、文政十年)にも、曾洛はいない。曾洛の影響範囲は尾張のみで、三河との繋がりも薄かったとみられる。こうしてみると、形骸化しつつあった暮雨巷の庵号を利用することで、自らの立場を形作っていくとした面もあったのではないか。

芭蕉が神格化されていた時代にあつて、暁台の直接の教えを受けていない曾洛が、一途に暮雨巷と暁台の顕彰にこだわった理由もここにあるのかもしれない。これまで掲げてきた発句をみても、曾洛の作品は時代の叙景句偏重に阿る凡庸なものが多い。<sup>8)</sup>しかし、「白萩や花のあたりの星月夜」(『いたびさし』等)には、「はるの日や梅のあたりのつゞみ箱」(暮雨巷句集)「香にふれよ菊のあたりのゑの子ぐさ」(暁台折手本)等、「あたりの」という表現を好んだ暁台に対して、表現の面での思慕もうかがえよう。

曾洛の暁台への私淑と顕彰活動について追ってきたが、このような中から、本稿では、とくに、曾洛の暁台遺漏作品収集の成果である



『新冬乃日』『新幽蘭集』の二点について、翻刻することとする（本号では、『新冬乃日』を翻刻する）。

### 三 『新冬乃日』の作者たち―その筆蹟をめぐって

『新冬乃日』には、架蔵本、藤園堂本、天理本等を調査した限り異版はないため翻刻には架蔵本を用いる。

#### △書誌▽

装幀 半紙本一冊。袋綴。

表紙 檜皮色亀甲紋繋ぎ艶出。

寸法 縦二三・三×横一六・〇浬。

題簽 左肩題簽剥落（天理本によれば「新冬乃日」双辺、縦一七・

六浬×横三・五浬）

扉 扉題「暁台 士朗 臥央 岱青 岳輅／各自筆／暮雨巷曾洛著

書（白印）」

○（一）八

丁数 全十九丁。

行数 序文（七行）、本文、六〇七行。

刊記 なし ただし、各巻の末尾に黒板で「誰珍藏」などと付される。

編・序跋 暮雨巷曾洛編。自序。

印 曾洛（序・落款）

刊年 文政末頃か。

各巻の構成と成立年代

1 「鳥羽田には」の巻 暁台・士朗両吟歌仙 巻軸に、「右暁台真蹟」

「天明八年頃・成立」

2 「けふもをれ」の巻 暮雨（暁台）・士朗・岱青・閻毛・白凶・臥央・羅城・筍大ら八吟歌仙 巻軸に、「右士朗真蹟」「寛政二年寛政三年頃」

3 「さはつても」の巻 士朗・岱青・東平・羅城・岳輅・臥央・暮雨・白凶ら八吟歌仙 巻軸に、「右臥央真蹟」「安永七年以降」

4 「行年や」の巻 岱青・士朗・周拳（暁台）・羅城ら四吟歌仙 巻軸に、「右岱青真蹟」「安永後期以降」

5 「木がらしに」の巻 岳輅・暮雨両吟歌仙 巻軸に「右 発句岳輅筆脇已下暁台筆」「安永七年以降」

6 「なちぐろの」巻（追加） 曾洛・士朗両吟表六句 巻軸に、「右士朗筆」「文化期」

年代の根拠について述べておく。1の発句は、『暁台句集』の他、『夜のはしら』（天明八）にのる。『暮雨巷句集（岡崎本）』にも朱線を付し、冬の部の配列（通し番号一三三）からも、天明八年頃の発句である。この頃の歌仙としてよいと考えられる。2の発句は、『暁台句集』のみの採録で、発句に成立年代の手がかりはない。ただし、筍大が、暮雨巷月並句合のみに参加する俳人（『暮雨庵評発句集』（架蔵写本）による）であるため、寛政二〜三年頃の成立であることは確実である。3と5は、『からふくべ』（安永七刊）から暮雨巷俳書に入集する岳輅が一座することから、安永七以降。4暁台の周拳号の俳諧での使用は、安永五年以降に認められる。それ以後、晩年にかけての成立か。なお、3の東平は、名古屋の本屋、万屋東平であろうか。未詳。さて、今回、翻刻を試みる『新冬乃日』は、芭蕉の『冬の日』、暁台の『秋の日』を念頭においたものであることはいうまでもないが、作品内容以外の面でも、暮雨巷門弟の自筆資料をもとに、模刻して掲げている点に大きな特徴がある。曾洛が自筆とした暁台および門弟の

真蹟資料について、少々検証しておきたい。

1 「鳥羽田には」の巻からみていく。暁台の真蹟資料については、戦前より断続的に紹介されてきているが、筆者も近年、随時紹介しつつある。比較的晩年の手を伝えている『暁台折手本』(仮題)をもとに、確認してみよう。付け句「霧ふかく傘に顔さし込て」〔図3〕と折手本「酔ぎめやほのかに見ゆる雛の顔」〔図4〕の「顔」字は、特徴的な崩しの字体が共通している。付け句「逢ふてわかれの辻酒をのむ」〔図5〕と折手本「酒のみの膝昼過ぬころもがへ」〔図6〕の酒も、旁の特徴が共通してあらわれている。付け句「子規伏木のおくにながらへて」〔図7〕と折手本「子規あらしにかゝる夜の声」〔図8〕の「子規」は、暁台の書き癖の特徴をよく表している。他にも、特徴的な運筆、字形が共通しており、「鳥羽田には」の巻は、暁台の真筆模刻とみて問題ない。

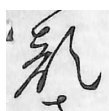


図3 顔

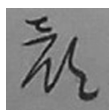


図4 顔

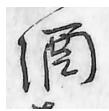


図5 酒



図6 酒

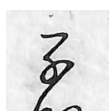


図7 子規

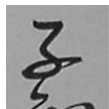


図8 子規

2 士朗筆とする「けふもをれ」の巻を確認しよう。士朗は、寛政の三大家として名を馳せた尾張の俳人である。枇杷園を名乗り、暁台亡きあとの尾張蕉門を実質的に統率した。士朗の真蹟資料は、ことのほか多く残存しており、古書目録の類を繙いても、その流通量の膨大さに驚かされる。ここでは、架蔵の『士朗折手本』と『化政期尾張俳人真蹟帖』(仮題)をもとに確認しておこう。付け句「かへるにハしかし〜と時鳥」〔図9〕と士朗の折手本「待わびて寐たぞ明日来よ時鳥」

〔図10〕の「時鳥」を比べると、「鳥」は折手本が手本という性格上楷書に近いが、「時」字の運筆が相似する。付け句「ちる花も日の長ければながくちり」〔図11〕と折手本「江の上やふたりしてをるうめの花」〔図12〕の「花」の運筆が一致する。この他、「月」「雨」「秋」等、字形、運筆が近い文字が多く見られる。『化政期尾張俳人真蹟帖』に見える「行徳をつみ重ねたる上に」〔図14〕と付け句「畳重ねしかたびらの露」〔図13〕の「重ね」も運筆が近く、これらを見れば、「けふもをれ」の巻は、士朗の真筆を模刻したとみてよい。

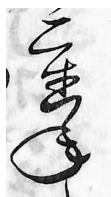


図13 重ね



図14 重ね

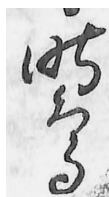


図9 時鳥

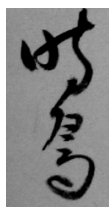


図10 時鳥



図11 花

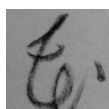


図12 花

3 「さはつても」の巻について、臥央の筆蹟は、まとまったものがみあたらないが、一宮市尾西歴史民俗資料館に磊石ら宛臥央書簡があるので、見比べてみたい。「さはつても」巻の付け句「かぐみさびたる」〔図15〕の「士朗」と廿日付磊石宛臥央書簡(整理番号:オ6)の「士朗」〔図16〕は酷似している。付け句「水はさむさと」の「臥央」署名〔図17〕の崩しと十月廿五日付江佐宛臥央書簡(整理番号:オ7)の「臥央」落款の崩しの特徴はほぼ一致する〔図18〕。付け句「手のごひもらひとろ〜と来る 士朗」〔図19〕の「来」は特徴的な崩し方であるが、臙念八付起連中宛臥央書簡(整理番号:オ8)の「来陽」〔図20〕の崩しと同じである。「さはつても」巻は、臥央の手を伝えるものとみてよいであろう。



図15 士朗

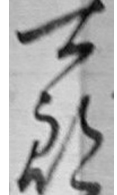


図16 士朗

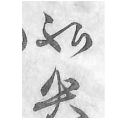


図17 臥央



図18 臥央



図19 来



図20 来

4 「行年や」の巻の筆蹟の主とされる岱青は、士朗門の高弟である。短冊類は、多く出回っており、さきに見た『化政期尾張俳人真蹟帖』（仮題）にも、染筆しているものの、まとまった真蹟がみあたらないため、今回の検証では割愛する。

5 「木がらしに」の巻は、発句のみ、岳輅で、脇以下暁台とされるものである。岳輅も暁台、士朗門の高弟であるが、岱青と同じく、判断材料に乏しいので割愛する。問題の脇以下であるが、発句とは別筆であることはうかがえるものの、暁台筆とは断じがたい。付け句「高燈籠の消（ケ）んとする時」「図21」と折手本「つくぐ」と雨見上るや高燈籠「図22」の「高燈籠」の運筆と字形は似ている。しかし、ほとんどは、筆勢、字形が大きく異なっており、暁台筆とは判断できない。

6 「追加」は、字数が少なく、士朗筆の模刻と判断しえない。

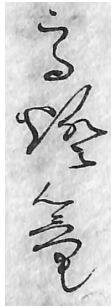


図21 高燈籠

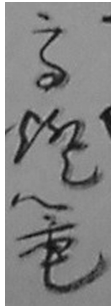


図22 高燈籠

以上、一部やや筆蹟の面で問題が残るものの、暁台、士朗、臥央の筆蹟を「謹てうつし」（序）た上で、模刻し、伝えようとする資料であることは確認できた。『新冬乃日』は、『都久間大』（曾洛編）でいうところの、暮雨巷庵主（暁台、臥央）および尾張五老（士朗、岱青、岳輅）の筆蹟を模刻し俳壇に示さんとするものであり、曾洛の強い意

志が感じられる俳書なのである。  
※なお、翻刻にあたり、句の清濁については原典を尊重する。前書においては、句読点を適宜補った。仮名遣いは原典のままとし、旧字体は新字体に改め、異体字は基本的に現行の字体に改めた。丁移りは「で示し、（ ）内に丁数を記す。

#### 四 翻刻『新冬乃日』

暁台 岱青  
士朗 岳輅 各自筆  
臥央

新冬乃日

暮雨巷曾洛著

額は歴代の軒に古び懐紙ハ文庫手箱の底にもめたり。侘つくしたるわび庵われさへあはれにおぼへはべる。むかし、正風宗師此国二遊び給ひし五歌仙をおもひいで、おのゝく自筆を謹てうつし梓にのぼせばる。  
暮雨巷曾洛（曾洛）（白印）

① 「鳥羽田には」の巻 歌仙  
鳥羽田には時雨降らし水菜舟  
冬たちこめし今朝かたの霧  
子規伏木のおくになからへて  
さくらハ花をいそくやう也

暁台  
士朗

おつとりと心のゆるむ臍けに

枕ころゝ隅にいねつむ

猿若か御代とりはやす櫓下

一時に売る鈍子百卷

あら汐のしめり桐油を広けたて

遊女煩ふ杜のくひ物

あきらめのよさに涼しき夢も見え

夜ハ星月夜うつくしき哉

のらゝと神馬出歩行荻芒

小鯛干かねて簀をたゝむ露

翌日ハたつ宇治のえせ者名残せん

宗祇に隙のなきそをかしき

しら玉の牡丹傾く宵の月

しめるたひゝ御扇召す

船哥の拍子ゆたかに踏立て

杭のとさきの鳶ハ追るゝ

大雪に転ひ馴たる蓑と笠

死ぬといふてもいちやハ靡かす

から紙を心しらすか引閉て

橋もと泊り柳暮行

また寒き鐘の奉加や進むらん

宝引好の仁平也けり

小夜更て姫入はしめる鼠とも

芝生かくれの月の古道

霧ふかく傘に顔さし込て

寺をひらきし盆の成行

ちくとした八坂の塔の脇住居

「1才」

一度二度ツ、伽羅かほのめく

物好きな奉公をして笑ハれつ

逢ふてわかれの辻酒をのむ

月花を守りの神も有ぬへし

此曙を春のたましる

右暁台真蹟

(黑板)

「2ウ」

「1ウ」

②「けふもをれ」の巻 歌仙

けふもをれ翌も枯野の萩の長

ほろりゝと寒き雨降

おもしろき人をうら戸へ送出て

小舟のつなを手くりよせけり

ほのかたまゝ蓮の咲残り

心を秋にうつす朝風

雀飛山は長等の山つゝき

寺を追れて面つゝミ行

喰切し指見付たる人もなく

枕の上を明るみしか夜

笋の皮すらゝと吹落て

かハりはてたる故郷の道

臍の緒に物書そへる盆の月

畳重ねしかたひらの露

ほゝつきのこち明けたかるいろゝに

みゝつを掘てありく鶏

ちる花も日の長けれハなかくちり

霞のおくに火のともる見ゆ

「3才」

暮雨

士朗

岱青

閻毛

雨

青

毛

雨

青

毛

雨

白鬩

朗

臥央

羅城

羅城

羅城

羅城

羅城

「4ウ」

「4才」

□<sup>歌</sup>の春大宴と聞えける

六十一の子をしかるなり

あはれ代は京鎌倉と引わかれ

梅も柳も暮て行年

貞室の短冊をみな焼捨て

袋に残る小判二ひら

須磨寺に降物は誰泪そや

木かくれぬまに魂むすひせん

かへるにハしかし〜と時鳥

鶯ハ音を入る夕月

飴粕のかわかぬ筵引すりて

戸もなき家を買かゝりけり

葉ハ枯て蔓這上る曲り松

時雨のあとの雪がひらつく

細き手のちよつ〜と出る駕の窓

今そわかれの御涙にて

情なや花にも交る魚の骨

消えてハのほる陽炎のあや

右士朗真蹟

〔黒板〕

③「さはつても」の巻 歌仙

俳諧歌仙行

さはつても雪ハ降なり奥山家

一酌さむし柏木のもと

石引の塵ふり進む声かれて

手のこひもらひとり〜と来る

青 〔5才〕

白ト

城

台

筍大

央

台

朗 〔5ウ〕

毛

青

白ト

ら城

央

大

朗 〔6才〕

毛

筆

さらり〜風過月ハ初月夜

濱面に船をたて懸る露

みたれ穂の芦かき分ていぬ拾ひ

よんへは鯛を煮て食し沙汰

つれなさや我ハ鎖て夜あかしぬ

恋のかたこと有無も放れす

すこ〜と河内の市出見おくりて

七本楢に嵐ふきこす

霜散りて秋の月ともおもはれす

君焚火せよにひ酒酌む

雁の声箭ふみを射込折〜に

水ハさむさと廿日雨降

なつかしや大内山の花ころも

かゝみさひたるかけるふの宿

朝霞あやしの験者まるりたり

石うちまけし河のはらたち

しろ〜と真蛇の肉の美しき

廊とらくさき麻買の茶屋

とかくして非時に付たる緋衣

痺に蹇し足とこそ見れ

渡り初すミて注連解橋の月

つはくら帰る風の夕霧

ひき残す門の茄子の美に成て

何をいふても娘根性

みち一里一身田のかねの声

きつね火きえて夜ハ明にけり

むさむやな軍の跡の太刀のをれ

羅城

岳輅

臥央

暮雨

士朗

白図

岱青

東平

白図

羅城

岳輅

臥央

暮雨

士朗

羅城

岱青

東平

暮雨

士朗

岳輅

臥央

暮雨

岱青

羅城

士朗

東平

臥央

〔7ウ〕

〔8才〕

〔8ウ〕

〔9才〕

〔9ウ〕

〔10才〕

〔10ウ〕

〔11才〕

黄金埋し井中の陽  
春日影望郷台をうたハ、や  
ぬれ羽にのこふ鶯の鶯

こゝろのまゝ大杯に花をうかめ  
柳さくらはうたぬまさかり

右臥央真蹟

(黑板) 誰珠蔵

④ 「行年や」の巻 歌仙

行年やわかれてはやき峯の雲

雪吹おこす芦原の風

荒馬に物喰すれハ耳立て

隅かすミまで焚火明るき

月かけて還御しつけき遠守

粉薬こほす露草の露

鶉あとなくてをかしく鼠鳴

朝嵐して盗人の道

千日の坊主しかれハ泣出し

神の田植の哥揃ひかね

處々枕を付し笹さして

道ハ妹背を初めなる覽

古里や芳野分入る秋の月

鞭にかけたる蕙の下り葉

侘齋が薄茶立出すきりくす

つかハれ飽て婆々ハ寝にけり

桐の木のうちろになりて花の春

狐鼠の初音うくひす

暮雨

東平

岳輅

士朗

臥央

羅城

青

全

青

城

朗

青

城

朗

青

城

拳

全

朗

青

朗

拳

朗

拳

┌ (13ウ)

┌ (11ウ)

┌ (12オ)

┌ (12ウ)

┌ (13オ)

朝霞佛の葉を一つかミ

裾吹ちきる須磨の汐風

物音のもの定らぬ松の間

いさ弓はらん老力見よ

我かちに宝ならへる夷とも

五月五日ハよき朝なり

つらくくと雫なからの軒しのふ

□<sup>歌し</sup> 酌あつけて駕かりに行

鞆うつ朝妻船ハ漕かへり

悲しきさまを時雨初ける

昼の月重たく見やる鹿の角

撰待の湯をあんこりと煎る

草の露子なきハ人の因果也

星さへくらき二里の山坂

三井寺へゆかふと鐘かうなるとや

ちれハさくらもはやむかしにて

むかし此おもしろさ有けふの花

鯨売よふ珍しの春

右岱青真蹟

(黑板) 誰珠蔵

⑤ 「木からしに」の巻 歌仙

木からしに吹落さるゝなみた哉

鴨たちさわく土手原の道

火の燈る方に太靴のさたまりて

もとり逃又ふたり淋しき

秋の情月の信を画きけり

羅城

青

全

青

城

朗

青

城

朗

青

城

拳

全

朗

青

朗

拳

朗

拳

┌ (13ウ)

┌ (14オ)

┌ (14ウ)

┌ (15オ)

なくさめ給ふ草花一瓶  
西の京今ハ昔の寺の露

雨 轆 「(15ウ)

双六うちの小銭わびつゝ  
明け近く女いさかひさゝへかね

雨 轆

馬ひきかけし恋の赤坂  
山鳥茨の上に客死す

雨 轆

百戒比丘の噯なさるゝ  
竹柱幾たび撫て夏の月

雨 轆 「(16オ)

蚊のかたまりに盃を投ケ  
操トとりの放下遅しと進ませて

雨 轆

烏帽子を拾ふ矢背の村中  
風高し花な焦を大かゝり

雨 轆

その臘夜の空ハ美し  
いつの春か見てえ初しかわすられず

雨 轆 「(16ウ)

紫衣をおし隠す窗  
上の瀬ハ笠置へかゝる責鼓

雨 轆

目たゝきしけき叢の夢  
金持を泣す秀句や吐ぬらむ

雨 轆

又降かハるきのえ子の雨  
味噌ハまつ糍仕込の口切て

雨 轆

あら置さへあハれ一周忌  
いふ事のいとゝ寒けき北隣

雨 轆 「(17オ)

さすかに遊女らしき奥筋  
袖二ツ情くらふる月の色

雨 轆

高燈籠の消んとする時  
秋の水七条辺にせまりぬる

雨 轆

気違ひ男泣て外走り

雨 轆

一口のむかし浄瑠璃くりかへし  
煮焚ハ遙遠き片隅  
雨 轆 「(17ウ)

暮よりも花の真昼ハ静也  
蔵六亀のあたり陽炎  
雨 轆

大叶  
右発句岳轆筆脇已下晝台筆  
〔黒板〕誰珎蔵  
雨 轆 「(18オ)

追加  
なちくろの小砂利をふめハしくれけり  
曾洛  
雨 轆

いつか答志の白雪を見ん  
士朗  
雨 轆

朝ほらけあり〜と竹みとりして  
洛  
雨 轆

月の霞ハ言葉にもよき  
朗  
雨 轆

風もはやかけのり句ふ古簾  
しわひみかんを又買にゆく  
朗  
曾洛珍蔵  
雨 轆 「(18ウ)

右士朗筆  
〔注〕

- 1 晝台の稿本系の発句集には、岡崎本『暮雨巷句集』(岡崎市図書館蔵)、名古屋本『暮雨巷句集』(架蔵)等があるが、自筆のものは残存していない。
- 2 『尾三古俳書解題』(さるみの会編、昭和57年刊)に立項のある俳書については、なるべく簡略な記述にとどめる。
- 3 寺島初美「化政俳壇」(さるみの会編『東海の俳諧史』泰文堂、昭和44年)には、暮雨巷の継承について記述があり、曾洛と士朗・臥央の関係は稀薄だったとする。
- 4 暮雨巷門の俳書(月並句合資料等)における雷文繋ぎの利用については、加藤定彦『俳諧常盤草』の紹介「暮雨巷月次句合の余波」(『東海近世』

- 24号、平成28年7月）に詳しい指摘がある。
- 5 富田志津子『二条家俳諧 資料と研究』（和泉書院、平成11年）に暁台の二条家俳諧の創始や二条家俳諧の系譜についてまとめられている。
- 6 頼原退蔵『頼原退蔵著作集4』（中央公論社、昭和55年）、栗山理一『蕪村と暁台』（岩波書店、昭和33年）他。
- 7 暁台と帯梅の関係については、寺島初美「村瀬帯梅の研究」（私家版、昭和42年）、拙稿「帯梅・闇毛宛暁台書簡の紹介」（『東海近世』21号・研究ノ1ト、平成25年）等参照。
- 8 注3の文献参照
- 9 『暁台折手本』は、暁台の自筆折手本。架蔵のもの（『俳人真蹟全集』一部掲載）と、岡崎市美術博物館蔵本が確認できる。拙稿「『暁台折手本』（仮題）の考察」（『連歌俳諧研究』111号、平成18年9月）参照。
- 10 『化政期尾張俳人真蹟帖』（架蔵）は、士朗、岱青、岳輅、桂五、帯梅など尾張俳人を中心にした染筆帖。拙稿「『化政期尾張俳人真蹟帖』（仮題）の紹介（上）（下）」（『蒼穹』81号・同82号、蒼穹発行所、平成19年1月、同3月）に翻刻。『士朗折手本』（仮題）は、『暁台折手本』（架蔵本）と箱に同梱されるもの。
- 11 旧尾西市歴史民俗資料館（現・一宮市尾西歴史民俗資料館）に磊石関係の資料がまとまって所蔵される。『美濃路起宿 本陣・問屋加藤家 問屋永田家 文書目録』参照。本稿で扱う臥央書簡は、『愛知県史』資料編20学芸（平成24年）の第二章「書翰からみた文化世界」（服部直子氏稿）に翻刻紹介される。

〔付記〕本稿は金城学院大学特別研究費の助成による成果の一部である。稿をなすにあたり種々ご教示くださった中野沙恵氏に感謝申し上げますとともに、貴重な書籍の調査と影印画像の掲載をご許可いただいた藤園堂書店・伊藤圭太氏、一宮市尾西歴史民俗資料館に感謝申し上げます。